

1 セントが寄付文化を育成する

(財)日本国際交流センター
チーフ・プログラムオフィサー

毛受敏浩

1 広場を埋めつくす1セント

2007年12月、ニューヨークのロックフェラーセンター前には異様な光景が広がっていた。人々が目にしたのは広場一面に敷き詰められた膨大な1セントコイン（1円にほぼ相当）。トラック数十台分の大量のコインである。これだけ大量の1セントコインが1か所に集められることはアメリカの歴史上かつてなかったことかもしれない。

これはニューヨークにあるNPO「コモンセンツ」が行った小学生らによる寄付活動の成果を示すデモンストレーションだ。「ペニーハーベスト」（ペニーは1セント硬貨のことで、ペニーハーベストとは1セント硬貨を作物に見立てたたとえで、「1セント収穫」の意味）と名付けられたこの活動にはニューヨーク市内の800以上の小学校が参加し、その活動は市域や州域を越えて全米に広がりつつある。

1991年から始まったペニーハーベストは、アメリカ最大の子どもによるフィランソロピー活動である。ペニーハーベストとは、子どもたちが募金活動としてペニーを集め、NPOに資金を提供する活動である。ペニーハーベストの活動は、4歳から14歳を対象としている。「コモンセンツ」のホームページによると（2010年1月21日）、これまで子どもたちが集めた募金の総額は680万ドル（約6億円）にのぼる。毎年集

まるペニーは増え続けており、2007年～08年には、7,990万3,335枚のペニー（80万ドル）が集められ、重さは200トンを超えた。ペニーハーベストのスタッフは、近い将来、全米中のペニーを集めつくしてしまうのではと本気で心配しているほどだ。

この経験を通じて、子どもたちはフィランソロピーとは何かを学び、フィランソロピーによって自分たちに世界を変える力があることを理解できるようになる。ペニーハーベストを実施する「コモンセンツ」では、ペニーハーベストによって、子どもたちは寛容性や道徳心を身につけ、募金集めの経験を通して社会参加のための責任感や社会の仕組みを理解できるようになるという。

ペニーハーベストの活動は「サービ斯拉ーニング」という手法によって行われる。サービ斯拉ーニングとはコミュニティでの慈善活動を体験学習として学ぶものである。社会の現状、たとえばホームレスの状況、社会の多様性といった問題を子どもたちが身近に受け止め、その解決を行うNPOの活動を学び、そして彼らを支援するという一連の活動を通して、社会に対する理解を深め、思考能力や問題解決の方法を身につけることができるという。そしてコモンセンツの掲げる理念は、子どもであっても社会をよくする力を持っており、フィランソロピーという道具を使うことでそれが可能になることを示

すことだという。

2 ペニーハーベストはどう行うか？

コモンセンツの行うペニーハーベストは学校単位で行われ、多くの場合カリキュラムの中に位置付けている。1年間にわたってさまざまな活動が行われるが、ペニーハーベストは3つの要素で成り立っている。それは、コミュニティのニーズ、社会をよくしたいという意欲を持つ子どもたち、そして家に死蔵されているペニーである。

ペニーハーベストの活動は教育委員会によるトップダウンの指示で地区の学校が参加をするものではない。コモンセンツのスタッフがニューヨーク市内の個々の学校を回り、教員の関心を高め、そしてペニーハーベストに参加したいと望む幼稚園、小学校、中学校とともに実施される。

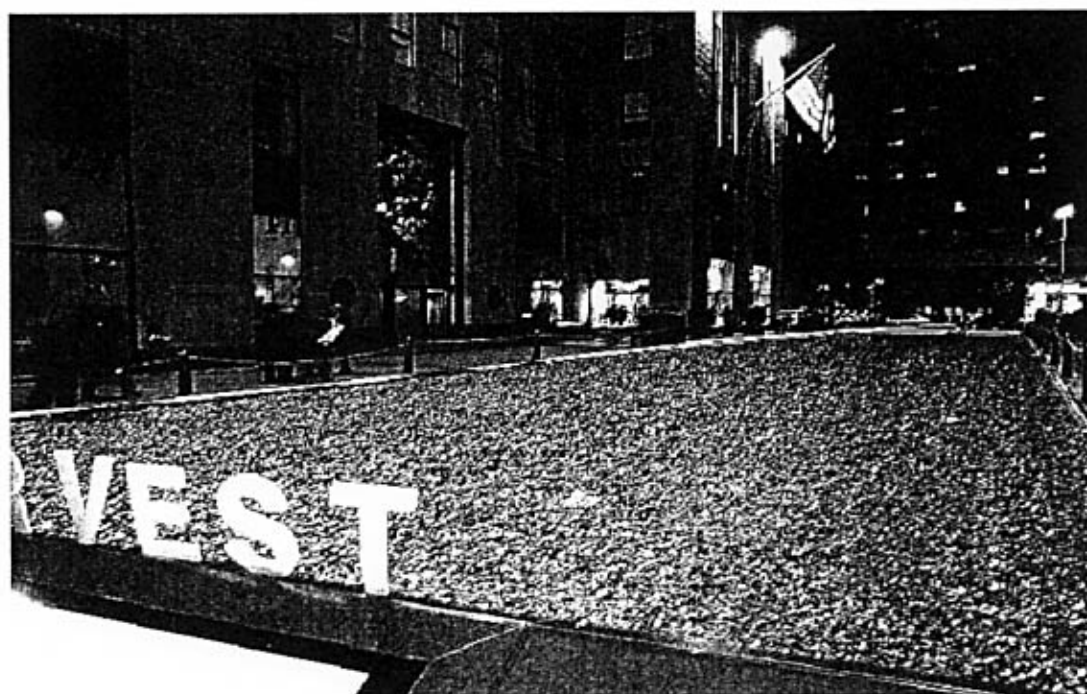
学校の事情に合わせてペニーハーベストの方法も異なり、全校児童が参加する学校もあれば、クラブ活動として関心を持つ子どもたちだけが実施する学校もある。現在、ニューヨーク

市を中心に50万人近い児童がこのペニーハーベスト活動に参加している。

コモンセンツではペニーハーベストに関心を示す学校の先生を対象にどのようにペニーハーベストの活動を行うのか、またペニーハーベストをどのように教育活動に結び付けるのかについて、定期的に研修を行っている。その研修を受けた先生はペニーハーベストの活動をクラスでどう実施するかを学び、それぞれの学校で実現可能な計画を煮詰めていく。

またコモンセンツでは参加する学校に対して、定期的にスタッフがアドバイスに訪れ、実施の際には教師用の手引書や募金を集めるときの小道具などをセットにした「ペニーハーベストキット」を提供する。このコモンセンツ自体の活動は民間財団の助成金や一般からの寄付によって運営されており子どもたちの寄付金は使われていない。

ペニーハーベストの小道具の1つはペニーを入れる袋で、25袋が学校に渡される。子どもたちはこの袋をペニーでいっぱいにしようと、自分の家だけではなく、近所を回って「ペニー取



広場を埋め尽くした1セントコイン

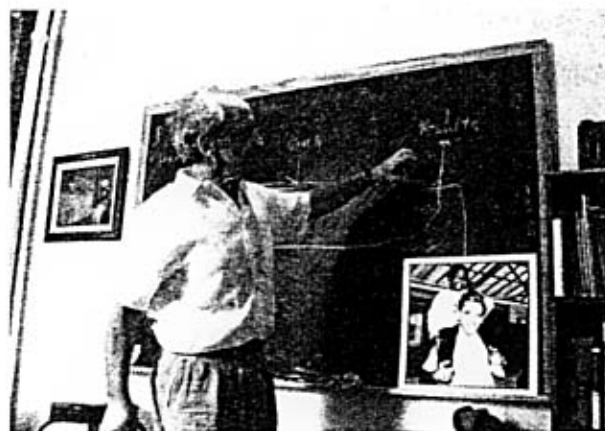
穫」を行うことになる。子どもたちは、そこで近所のおばさんやおじさんになぜペニーを集めているのか、ペニーハーベストとは何かについて説明し、ペニーを集めて回る。ペニーを寄付してほしいと言われた大人たちは喜んでペニーを子どもたちに差し出して子どもたちを勇気づける。

1校で平均20袋程度のペニーが集まり、金額にすると1,000ドル、日本円で9万円相当になる。1袋にはほぼ5,000枚のペニーが入る。20袋の重さはなんと270キロにもなる。集めたペニーを学校に持ち寄った子どもたちは、自分たちの「収穫」の成果を積み上げられたペニーの袋として実感することができる。学校では、集められたペニーをどうすれば効率的に数えられるかなど、ペニーハーベストの活動は算数の授業の中でも取り入れられ、子どもたちに活かした教材として活用される。

3 ペニーハーベストはどのように始まったのか？

ペニーハーベストのアイデアは、コモンセンツの創始者であるテディ・グロスの個人的な体験がもとになっている。ニューヨークで劇作家をしていた彼は、ある時3歳の娘を連れて近所を歩いていた。その時、娘は路上にいたホームレスを見つけてかわいそうに思い、父親に家に連れて帰って食べ物をあげたいと言いだした。彼は困惑した。ホームレスを家に連れて帰ることはとてもできないが、かといって、娘から冷たい人間だと思われたくない。彼はその時、子どもは人を助けたいという純粋な気持ちを持っていること、そして大人である自分は周囲にいるホームレスに対して見て見ぬふりをしてきたことに気づかされた。

その気づきがきっかけとなって、ホームレスの救済のために募金活動をしようと思いついた。その時、考えたのがどこの家庭も持てあま



ペニーハーベストの効果を力説するテディ・グロス氏

しているペニーを集めることだった。アメリカでは使い勝手の悪いペニーをガラスの瓶につめておいてあることがよくある。ペニーを寄付してくれと言われて断る人はいないだろうと考えた。

そして、彼は自分の住んでいるアパートの住人を対象にペニーを集めようと考えたが、そこで壁にぶち当たった。これまで住民とまともに話をしたことがなかったのだ。彼は10年以上ニューヨークで同じアパートに住んでいたが近隣との付き合いはほとんどなかった。

隣の家ドアをたたいて、家にあるペニーをホームレスのために寄付してくれないかと話しかける勇気を振りしほるのに、彼は1年かかったという。しかし、その後、彼の始めたペニーハーベストは、多くの賛同者を得て広がりを見せ始める。そして近隣での募金活動から学校へと広がり、学校単位での募金活動としてニューヨーク市全体に拡大していった。

4 集められたお金のゆくえ

子どもたちはペニーハーベストと並行して、地域の中でどのような問題があるかを学び、そして地域で活動するNPOについて調べる。そして子どもたち自身が個々のNPOを訪問して活動を調べたり、NPOの代表者を学校に招き、NPOがどのような活動をしているのか、なぜそれが

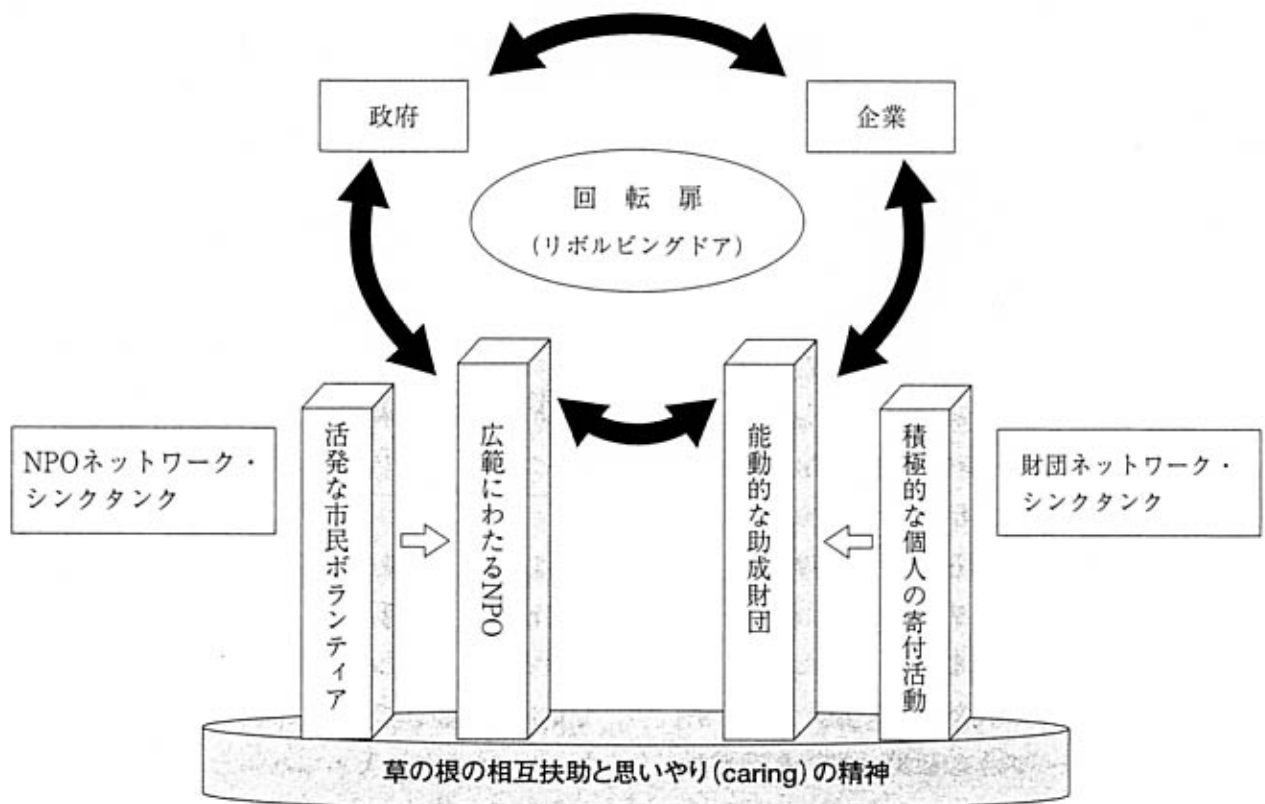


図 「米国の民間公益活動システム」 (毛受作成)

必要なかを学んでいく。

そして子どもたちが集めたお金は子どもたちの代表による円卓会議（ラウンドテーブル）によって使い道が決定される。円卓会議では、どのような活動、団体に集めたお金を使うべきか、子どもたち同士が話し合う。支援を行う先は地区の公園の美化活動から移民を対象とする英語教育への支援まで幅広い。子どもたちはNPOの活動を通して社会にあるさまざまな問題や社会の仕組みを学んでいく。

2009年6月にベニーハーベストの活動に参加する小学校を訪問する機会があった。ニューヨークのチャイナタウンの近くの小学校で、この日、NPOへの寄付金の贈呈式が行われていた。この学校では2年生から5年生の30人の児童が参加して、1週間に1回程度、昼休みや放課後に集まり、ベニーハーベストの年間活動を行ってきた。授賞式には子どもたちや学校の先生、寄付を受けるNPOのほか、コモンセンツのスタ

ッフ、PTAのボランティアも招かれていた。

寄付を受けることになったNPOは「God's Love We Deliver」「The Smile Train」「The Hunger Project」の3団体で、それぞれのスタッフは寄付金の小切手を受け取り、子どもたちに「あなた方は立派なフィランソロピストです」とお礼を述べた。

「God's Love We Deliver」はニューヨーク市内で自宅治療を受ける患者に食事提供を行うNPOである。「The Smile Train」は世界中の口蓋裂障害を持つ子どもに手術を行うNGO、「The Project Hunger」も途上国で国際協力の活動を行うNGOだ。子どもたちはニューヨークの地域内の活動だけではなく、世界で活動するNGOに対しても関心を持ち、彼らへ寄付金の支給を決めた。子どもたちは一連の活動を楽しみながら行っており、自分たちの行動によって社会に貢献できたことを誇らしいとベニーハーベストの活動を終えた感想を述べた。

子どもたちの父母や学校の教師は、ベニーハーベストは思いやりの文化 (caring culture) を育む大切な活動であり、子どもたちに社会の一員としての意識を植え付け、自分自身の自尊心も高めることのできる素晴らしい活動だと評価していた。

5 NPOの育つ土壌とは

日本では寄付文化が根付いていないといわれる。アメリカ人と比して日本人の寄付額は数十分の一に過ぎない。日本のNPOも数こそ増えたものの、アメリカのような規模の大きな団体は例外的で、専門性の高いスタッフを雇用できるNPOは極めて少ない。

アメリカの非営利セクターを取り巻く環境を図「米国の民間公益活動システム」(前頁)によって説明してみよう。アメリカの活発なNPO活動の土台には、社会に住民の相互扶助、市民の思いやりの精神が根付いていることがある。そしてその土台の上に、行動主体としての活発なボランティア活動があり、広範に活動するNPOが存在する(図の左側)。このNPOを支えるのが市民による積極的な寄付活動であり、市民寄付が組織された形としての助成財団の活動がある(図の右側)。

アメリカでは個人寄付だけではなく、助成財団も活発であり、2008年の助成総額は456億ドルに達する。アメリカの助成財団の9割は企業ではなく市民が設立した財団であり、リーマンショック以前は毎年3,000の新規の助成財団が設立された(注1)。

そしてこの4本柱を側面から支えるNPOや財団のネットワークやシンクタンクがそれぞれ存在する。さらにNPOと政府、企業を自由に行きかう「回転扉(リボルビングドア)」と呼ばれる職業人の移動があり、この回転扉がNPOのみならず政府や企業の組織の活性化に役立っている。この強力なシステムがアメリカ社会の力強

さの源泉になっていると考えることができる。

日本に当てはめてみるとどうだろうか。図の左側は次第に整い始めているが、図の右側、資金サイドが決定的に弱いことに気がつく。寄付ばかりではなく、助成財団も年間の増加率は1、2件にすぎない(注2)。個人の寄付および財団助成の民間資金サイドのテコ入れが最も必要だということになる。日本はアメリカからNPOについて多くを学び、NPOの人材育成やマネジメントを取り入れ、主として図の右半分に着目してその強化にあたってきたが、現在は壁にぶち当たっている。近年、ようやく図の右側に関心が集まりつつあり、日本ファンドレイジング協会の結成などの動きがある。

しかし、NPO活動を根本的に強化し、社会の活性化の起爆剤になるためには、その土台に着目し、土壌改良に着手する必要がある。コモンセンツが行っている活動はこの土壌部分を耕すこと、そして図の右半分につなげることにある。時間はかかるろうとも、幼児や小学生から寄付の意義を教える草の根の活動を広げていくことが、成熟したNPOセクターを創造する王道だろう。その意味で、コモンセンツの活動は日本にとって極めて示唆的であり、また「新しい公共」を市民の間に根付かせる重要なヒントがここにあると思われる。

(注1) 金融危機へのアメリカの財団の対応については、毛受敏浩「アメリカの民間非営利活動」(『月刊フィランソロピー』2009年8月号)に詳しい。

(注2) 助成財団センターのHPによれば2007年の助成財団の設立数は1件で、1990年の65件をピークにして過去数年は数件となっている。

